

番号	設問	回答	対象
1	解毒剤自動注射器は様々な種類の化学災害・テロに有効である。	×	講義編
2	自動注射器は医師の指示がある場合に限り使用できる。	×	講義編
3	自動注射器による解毒剤投与は可及的速やかに実施するべきである。	○	講義編
4	自動注射器に含まれる薬剤はアトロピンとオキシム剤の2種類である。	○	講義編
5	自動注射器は1種類で小児から大人まで対応できる。	×	講義編
6	自動注射器の使用にあたっては、化学災害・テロの蓋然性、症状、化学剤検知器の各条件の確認を行う。	○	講義編
7	化学テロであることが疑われた時点で専門家への相談が何より優先される。	×	講義編
8	化学剤検知器によって神経剤の陽性アラートが発報した場合には、5症状が全て揃わずとも即座に解毒剤自動注射器を使用すべきである。	×	講義編
9	傷病者と救助の需給バランスによって、救助と解毒剤自動注射器使用の優先度は変わる。	○	講義編
10	解毒剤自動注射器の使用は、個人個人の隊員の判断に基づいて実施される。	×	講義編
11	化学災害・テロの蓋然性、症状、化学剤検知器に関する各条件の全てを満たさない場合は、必ず専門家の助言を求める必要がある。	×	講義編
12	現場に臨場した医師が、自身の専門性に基づいて「専門家の助言」を行うことを了承した場合は、その医師の助言に基づいて、自動注射器の使用の可否の判断を行ってよい。	○	講義編
13	現場に臨場した医師が、部隊員に代わって、その医学的見地に基づいて「専門家の助言」の照会を行ってよい。	○	講義編
14	自分自身の具合が悪くなった場合、自動注射器を用いて解毒剤の自己注射を行う際には、症状5項目を満たす必要がある。	×	講義編
15	自力で動くことができる傷病者は自動注射器の使用の適応にならない。	○	講義編
16	自動注射器は、傷病者の大腿外側中央部又は臀部に垂直に注射する。	×	実習編
17	自動注射器は、安全キャップを外して、傷病者の特定部位に押し付け、10秒間保持し、そのまま垂直に引き抜く。	○	実習編
18	使用後の自動注射器は、針先が自動で引っ込むため、自分自身に針が刺さるリスクはない。	×	実習編
19	使用後の自動注射器は、そのまま汚染物として、汚染された衣類等とともに廃棄してよい。	×	実習編
20	以下の5項目のうち神経剤に曝露された傷病者の自覚症状の判断にないものはどれか？ ① 突然鼻水がでる ② 突然口が渇く ③ よく見えない、暗い、ぼやけるなどの視覚異常 ④ 目が痛い、涙が出る ⑤ 息がしづらい、吸いづらい、息苦しい	②	講義編
21	神経剤に分類される薬剤は全て拡散にやすさ、人体への影響など同じである。	×	講義編

22	化学剤に対処する場合には、ゾーニング、検知、除染、防護などの特別な安全確保が重要である。	○	講義編
23	神経剤によって、涙や唾液の分泌が停止して目が良く見えなくなる症状が出現する。	×	講義編
24	神経剤により重症化すると、呼吸困難やけいれんなど特徴的な症状が出現するので、神経剤が使用されたことがすぐにわかる。	×	講義編
25	神経剤による化学テロの際には、除染は重要であるが、時間が経過してからでは有用性が低下してしまうことがある。	○	講義編
26	種々ある化学剤の中で、神経剤は即効性や致死性などの危険性が高いものがあり、一刻も早く解毒剤を投与することが重要である。	○	講義編
27	自動注射器は現場よりも医療機関で使用する事が推奨される。	×	講義編
28	緊急の現場であっても、自動注射器の使用には禁忌がないことを確認することが必要である。	×	講義編
29	化学剤検知器の結果は、自動注射器使用の判断基準に含まれる。	○	講義編
30	現場に2人以上の傷病者が倒れていた場合には、化学テロの可能性が高い。	×	講義編
31	神経剤散布現場の傷病者は全員同じ症状が出現する。	×	講義編
32	化学剤検知器の結果は完全に正しいとは限らない。	○	講義編
33	専門家に対して、想定される原因物質とその可能性や自動注射器を用いるべき状況であるか否かに関する助言を求めることができる。	○	講義編
34	自動注射器の使用対象は、傷病者及び汚染地域等で活動する隊員で体調が悪化した者である。	○	講義編
35	自動注射器は1種類だけしか存在しない。	×	実習編
36	化学テロに対する医療の目的として、正しくないものは次のうちどれか。 ① 有毒物質の解明 ② 有毒物質の除去 ③ 有毒物質による身体症状の軽減 ④ 有毒物質による身体症状の回復	①	講義編
37	化学テロに対する蘇生行為のうち、最も優先すべきものを次の中から2つ選べ。 ① 薬剤 (D) ② 気道 (A) ③ 除染 (D) ④ 呼吸 (B) ⑤ 循環 (C)	①、③	講義編
38	爆発に伴う出血が見られる場合、使用判断モデルを用いて自動注射器を使用することはできない。	○	講義編
39	使用判断モデルに従い自動注射器による解毒剤の投与を行った場合は、迅速に医療機関に搬送する必要はない。	×	講義編
40	使用判断モデルの症状の有無の要件については、自力で避難できた傷病者に対して症状の有無を尋ねることで確認を行う。	○	実習編

41	「息がしづらい、吸いづらい、息ぐるしい方はいますか？」という質問に対し、「はい」と答えた傷病者は1名のみであった。残りの症状の項目については、複数人が「はい」と答えた。1項目のみ症状のある人が1人だったので、症状の要件は満たさない、と判断した。	×	実習編
42	化学テロの蓋然性の高い蓋然性の高い現場において、症状の要件は満たさなかったが、化学剤検知器は陽性アラートを発砲している。原画現場に臨場した医師が「傷病者が縮腫している気がする。」といった。どのような対応を取るべきか。 ① 専門家に助言を求める ② 自動注射器による注射を実施する ③ 再度症状の確認を行う ④ 要件を満たさないで、自動注射器を使用しない判断を下す	①	実習編
43	化学災害・テロの蓋然性が高い現場で、化学剤検知器は陽性アラートを発砲しているが、症状の要件を満たさなかった。現場に臨場した医師が診察を行い、神経剤の可能性が高いが確証が持てない、という・どのような対応を取るべきか。誤っているものを選べ。 ① 臨場した医師の発言を専門家の助言と受け取って自動注射器を使用する ② あらかじめ指定した専門家に連絡を行い、助言を求める ③ 公益財団法人 日本中毒情報センターの化学テロ専用ホットラインに連絡する ④ 臨場した医師に専門家への照会を代行してもらえないか相談する	①	実習編
44	自分自身の具合が悪くなくても、自力で動くことが出来る場合は、自動注射器による解毒剤の自己注射は行わない。	×	実習編
45	助言を行う専門家は、想定される原因物質とその可能性、自動注射器を用いるべき状況であるか否かについて助言できる医師であることが必要である。	○	講義編
46	化学テロに対する医療DDABCの最初のD・Dは薬剤と除染である。	○	講義編
47	怪我をしていない傷病者が3人倒れていたため化学災害・テロを疑った。	○	実習編
48	化学災害・テロの蓋然性の高い現場で、症状の5項目のうち一部を自覚していない傷病者が存在したので、症状に関する自動注射器使用の要件を満たさないと判断した。	×	実習編
49	化学災害・テロの蓋然性が高い現場において、症状の項目も満たしたが、化学検知器が未だ到着しなかったため、専門家に助言を求めた。	○	実習編
50	専門家に助言を求める際には縮腫の有無を問われるので、事前に傷病者の瞳孔を確認しておく必要がある。	×	実習編
51	多数傷病者現場に到着した直後に、ドクターカーで臨場した医師から、神経剤の可能性が高いので自動注射器の使用を指示された。医師の指示なのでそのまま従った。	×	実習編
52	両側の大腿部をけがしている傷病者であっても、上腕に自動注射器を使用してはいけない。	○	実習編
53	自動注射器を使用する場合は、力が入るよう、注射器の反対側（底部）をしっかりと親指で押さえて注射する。	×	実習編

54	自動注射器を使用する際には、傷病者に対して事前に声をかけてはならない。	×	実習編
55	適切な注射部位を確保できない場合は、傷病者の体位を動かすことなく、注射実施者自身が打ち方を工夫して注射を行う。	×	実習編
56	自動注射器の使用判断モデルについて、その基本的考え方として誤っているものを選び。 ①個別的 ②客観的 ③非裁量的 ④特異的 ⑤全体的 ⑥慎重・簡潔・迅速	①	実習編
57	自動注射器の使用判断モデルに従い解毒剤投与を行った場合は、迅速に医療機関に搬送する必要はない。	×	実習編